

有島武郎研究

——著作集第十三輯『小さな灯』を読む——

宮野光男

有島武郎にとつて、有島武郎著作集第十三輯『小さな灯』が刊行された大正十年は、その前年あたりから感じられていた〈落潮〉感を、より内面化したものとして認識した年であった。つまり第十二輯で明らかにした、その状況からの回復を意図した変化志向、新しい可能性追求の試みは、引き続き有島の重要な課題だったのである。

著作集第十二輯『旅する心』刊行の事情は、有島にとつて、意識的にはかなり消極的な口吻で説明をしていることから察することができるように、かならずしも積極的な意図があったというわけではないように見受けられる。有島にとつてそれは、〈つなぎ〉（八木沢善次宛書簡 大九・九・二十二）であり、〈仕方なしに〉（原久米太郎宛書簡 大九・九・二十一）出すものだとしようように意識されていたのであり、したがって内容も、〈読みなほして見ると実に呑気なくだらないもの〉で、〈汗顔の至〉と言わざるをえないものだった。何故そのようなことになってしまったのかということについて有島は、『旅する心』の書後に、計画していた「運命の訴」という作品が、書き始めてはみたものの、〈どうしても気に入りません〉。

書いたもの（の）上に薄い皮のやうなものが出来て、私の心持ちとどうしてもびつたりそくはない、ようするに自分には〈落潮〉が到来しているのだ、そして、それがいつ〈恢復するかは自分でも知ることが出来ない〉ので、〈それでその申し訳といふのではないが、己むを得ず旧稿「旅する心」を〉出版したのだと書いている。

この傾向は、〈創作は出来ない出来ない。今度位苦しんだことはない。而して今度位出来ないことはない。何んだか僕の力はもう終焉に來たのではないかと思つて淋しくさへなる。原稿を焼却して旅に出ようとすると誘惑に幾度か襲はれる。心持ちがすつかりぐれてしまった〉（足助素一宛書簡 大九・九・十五）とか、〈私はつまづきました。創作を途中で擲たねばならぬはめになりました。私には今何の力も感ぜられません。こんなみじめな目に遇つたことは生まれてから無いといつてい、でせう。私は今何もしないでほんやりしています〉（木田金次郎宛書簡 大九・九・二十五）と述べているところからも明らかのように、有島によつて認識されていた危機感の顕現としての表現であり、この本質は、創作上の〈危機〉とか、〈自信を失ひはじめ〉たというだけではなく、〈将来に対してもどん

どん生長していく成長力があるか無いかを疑ふやうになりました。)
〔大島豊苑書簡 大九・十一・十八〕という問題として、つまり、
〔自分の内部にあるもの、要求にいつはらず自分をまかせて何処までも行つて見よう。〕(原久米太郎宛書簡 大九・六・二十三)とい
うように、芸術即生活と考えている有島にとっては当然のことでは
あるが、人間として基本的な内部生命の欠落を思いつつ、なお、そ
の可能性を信じて生きて行こうとしなければならぬ、生きかたに
関する悩みとして位置づけられる問題だったのである。

なればこそ、そのような状況からの回復を志向せざるを得ない有
島であることが、彼の変化志向、新しい可能性追求の姿勢のひとつ
の表現として、〈私達の生涯がこの古跡訪問の一事によつて変化に
出遇ふ事が何時かは必ずあるだらうに。〉(「旅する心」という期待
を書き込まなくてはならなかつたのである。

そのような状況からの脱出のために意図されたのが、生活改造で
あつたことは周知のことである。後に断行された財産処分(註一)、
農場解放(註二)などが事柄としての具体化のひとつのプログラム
であつたにちがいないが、本質的には、もつとちがつた可能性発見
をその内容とする危機脱出計画だつたといふことができる。

この時期、以前にもましてホイットマン詩の翻訳を意欲的に試み
ているのも、(そのやつたことの中の一つとして、私はホイットマ
ンの詩の訳を二三企てました。)(「小さな灯」書後)と書いている
ことから明らかかなように、(作よりも先づ生活の改造)(「今年は何
を書くか」大一〇・一・七)であると同時に、それをひとつの契
機として創作への新しい活力を得ようとする有島の起死回生の思い

の頭われであつたにちがいない。

大島豊苑の書簡には、〈私は今落潮に居ます。然し少しづつでは
あるが力を恢復しつつ、あるやうです。来年にでもなつたなら又仕事
を始める機会もおこりませうか。〉と書いている。さきに掲げた書
後のなかでも、〈私は私がさうなつた原因を見出した〉、〈この原因
さへ取り除かれ、ば、前よりは少しは自分だけに気に入つたもの
を産み出すことが出来るとの自信を持つことが出来るやうになつ
た。〉と述べているように、いちおうの心づもりはできあがつていた
のであろう。

そのような有島の状況を受けて刊行され著作集第十三輯であるか
らには、それが、〈この度の輯は極めて雑多な小品〉という、いわ
ゆる雑纂形式の輯となつてしまつていたとしても、そうであればあ
るほど、そのこと自体が、当時の有島の内面性を十分に反映してい
るものであつたことは想像に難くないところである。

『小さな灯』を読むに当たつてまず確認すべきことが、依然とし
て変化志向、新たな可能性追求の姿勢であつたことを概観したので
あるが、この著作集に収録されているエッセイ群がそのことをいか
に表現しているのかを、例によつてこの輯の巻頭につけられている
ホイットマン詩によるエピグラフとの関連において瞥見してみよ
う。

有島武郎著作集第十三輯『小さな灯』に付けられているエピグラ
フは、ホイットマン詩「ヨローロッパ」の末尾部分、最後の三行であ

る。なお、この詩の有鳥訳はない。

家は締っているか、主人は出かけてるすなのか、
それでも用意は怠るな、倦まずたゆまず監視をつけよ、
やがて主人は帰ってくる。先触れたちが現われる。

この詩は、一八五〇年に“Resurgemus”というタイトルで発表され、後に『草の葉』初版に無題のかたちで収録され、その後「路傍にて」というタイトルで集められた詩群のひとつであるが、「旧大陸の残忍な王者に反抗して、自由のために闘った殉難者の精神はけつして滅びることなく、他の若者の中に、同胞の中に、生き続け、王者たちに反抗すると歌」われたものであると言われている（註三）ように、全体的にみれば、ホイットマンによる自由実現のための革命待望詩である。

ホイットマンは、「人民」に対する王侯貴族たちの圧政の歴史を、〈数えきれぬ苦しみ、殺害、貧欲のために、／卑劣な手段の限りをつくして犯された宮廷の盜賊行為、貧乏人の賃金をその素朴さにつけこんで盗み取った行為〉（岩波文庫版『草の葉』以下同様 註四）とうたっている。そして、墓には、〈あまたの死体が、若者たちの血まみれの死体が横たわり、／絞首台の綱がずつしりと垂れさがり〉、〈貴族たちの射ち出す弾丸が空を飛びかい、権力者たちが声高に笑う〉現実がある。しかし、とホイットマンはうたうのである。〈そしてこれらのことが実を結ぶ、しかもなかなかいい実を結ぶ〉のだ、と。

〈虐殺しきれぬ生命力〉、それは、生の可能性の表現なのである。

ホイットマン詩集『草の葉』初版の序は、第二版からは削除されているが、清水春雄氏の指摘（註五）にあるように、初版の序における自由への期待は、「青いオンタリオの岸で」に取り入れられており、そこにはホイットマンによって自由のために闘う詩人の使命が、〈偉大な「理念」、完全で自由な個人という理念のために、／そのために、詩人は指導者の中の指導者として先んじて歩む、／彼の態度は奴隷たちを元気づけ、外国の独裁君主たちに恐怖を与える〉、とうたわれている。

この思いが、歴史的な事実のなかで位置づけられているのが、銘詩「ヨーロッパ」なのである。

ここには、〈旧大陸の残忍な王者に反抗して、自由のために闘った殉難者の精神はけつして滅びることなく、他の若者のなかに、同胞の中に、生き続け、王者たちに反抗〉し続ける可能性に充ちた存在への期待が表現されている。

もち論、ホイットマンが、その理想がすぐさま実現するなどと思っているわけではない。むしろ、眼に映するものは〈王者〉〈貴族〉たちの繁栄であり、聞こえてくるのは彼らの〈声高な〉笑い声であつて、〈人民〉の意志を表現する〈若者〉たちには、挫折と絶望の歴史が待ちかまえているのが現実なのである。しかし、やがて、〈肉体を離れた精神を暴君の武器が解放す〉るときに、若者たちのなかで生き続けた〈自由の種子〉は、〈かならずそれは目に見えぬ姿となつて地上を潤歩し、ささやきかけ、助言し、警告を与える〉ことができるようになる、というわけである。

ここには、辛抱強く待ち続けるホイットマンの姿がある。そのプロセスにあつては、〈敗北も偉大〉（失敗したヨーロッパの革命家に）だとするホイットマンであることも興味深いことで、有島がかつて武者小路実篤の新しい村運動に対して示した、

然し率直に云はして下さい。私はあなたの企てが如何に綿密に思慮され実行されても失敗に終ると思ふものです。失敗に終るのが当然だと思ふものです。あなたがこの企ての緒に就いてもおられない時、こんな事を云ふのは幸先きの悪い事のやうですが、私は思ふ所を云ふより外はないのです。（中略）けれども失敗が失敗ではありません。今までかゝる企ては凡て失敗に終わつてゐます。然しそれを普通の意味の失敗とは云へません。若し今の世の中でかゝる企てが成功したやうに見えたら、それは却て怪しむべき事であらねばなりません。そこに人は屹度妥協の臭味を探し出す事が出来るでせうから。（武者小路兄へ）大七・七）

というメッセージと共通する思いを見ることが出来る。

この詩が有島によつてエピグラフとして採用された詩であること、もうひとつの積極的な理由は、先にも述べたようにその自由獲得のために闘うのが、詩人たちの使命であるとホイットマンがうたつてゐることであろう。

ホイットマンが自由を求め続けた詩人であることは、先述のように『草の葉』初版の序において明らかであるが、その担い手が詩人であることを、

詩人ほどに自由を信奉したり歓迎したりするものはいない。詩人は自由の代弁者であり解説者である。古今の詩人たちこそが、自由というこの壮大な理念にふさわしく——彼らの手にその理念がゆだねられ、彼らにはそれを支持する義務があるのだ。この理念にまさるものは何ひとつなく、それを歪めたり卑しくさせたりできるものもまた皆無である。（岩波文庫版『草の葉』序）

と述べている。

歴史と社会の影響下に生活してゐる人間にとつて、それとの関わりを無視して自由を求めることは一種の観念論でしかないが、詩人が求めているものが、たんに政治的な自由にのみ限定されたものであるとするのは、逆にホイットマンの本来めざしてゐるものから逸脱してしまふにちがいない。ホイットマンはあくまでも〈魂の自由〉を求め、その可能性を詩人に託してゐるのであり、有島のホイットマンへの共感と同情もこのところにあるように思われる。末尾三行が、エピグラフとして引用されているのもあるいはそのためなのではないだろうか。

「ヨーロッパ」をどう読むか、さまざま可能性があると思われ、以上のように読んだとして、有島が引いている最後の三行の解釈の可能性を、換言すればエピグラフとして掲げている積極的な意味についてさらに考えをすすめてみよう。

まず、前提になっている三十五行の省略された部分を意識しながらの解釈から考えてみよう。

岩波文庫版の、サブタイトル〈合州国紀元七十二年、七十三年〉につけられている註によれば、〈合州国紀元七十二、七十三年——一八四八年、四九年のこと、この頃ヨーロッパの各国に革命が相次いで起こったが、やがて反革命によっていずれも圧殺された〉という。このことから明らかのように、すでに見てきたように、基本的にはこの詩は革命待望詩であり、革命成就の可能性が問われている詩なのである。その文脈からすれば、〈家は締まっているか、主人は出かけてるすなのか〉という表現には、革命の遂行者不在の認識がある。しかも、家が締まっている状況とは、有島にとって死の状況認識にはかならないことは、たとえば有島の初期の作品「死と其前後」(大六・五)の序幕において、〈また一つの命に永却開く事のない錠前をかける時が来た。錠前はいいか。鍵はよくあふか。錠前も鍵も錆びてはぬかないか。その用意をして置けよ。〉という(死)の台詞からも明らかであるように、時代の閉息状況は、啄木をまつまでもなく死の状況なのである。そして、ホイットマン詩に、〈戸の錠前をはずせよ／蝶番ひから戸そのものをはずせよ〉(「自己を歌う」二四)という表現があるように、戸を開けるといふことは、死からの解放、つまり人間の、自己の可能性の開示を意味しているのである。

やがて主人は帰ってくる、先触れたちが現われる。

ここで、待望されている〈主人〉が革命成就者であることは間違いないまい。

自由のために殺された者の墓なら自由の種子を茂らせぬものなく、その種子がまた時くれば種子を生み、／それを風が遠くに運んでふたたび地にまき、そして雨と雪とが養分を与える。

命の種子を受け継いでいるのは〈若者〉であり、ホイットマンにあつては〈自由〉そのものであつてもいい。いずれにもせよ、〈先触れ〉たちの足音がまず聞こえてくるというのであるが、『小さな灯』に収録されているエッセイ群の第一部にあたる四篇のエッセイ——「自己の要求」(大十・一)、「自分に云ひ聞かせる言葉」(大九・三)、「価値の否定と固定と移動」(同・五)、「一人の人の為に」(大十・三)が「聲音」という表題でまとめられているのは、その意味で象徴的である。

ところで、「聲音」のエッセイ群の特色は徹底した個性尊重の思いが貫かれている、ということである。

今の私に取つては凡ての前に個性の要求、然る後に個性の建設、然る後に社会の改造がある。今の私からいふと、自分の内部的要求を徹底しようとするこゝとなしには、問題は半片たりとも私の眼の前に現れて来ない。(「自己の要求」)

有島が求めた充実した個性の根本的な機能としてのそれは、繰り返しになるのだが（徹底的に自己本意の人間であらうとしてゐる。この立場が徹底的に実現されるやうに自分の生活を導いて行かうとしてゐる）者の本質であり、（それが社会にどんな益を与へるか損を与へるかといふようなことは考へることが出来ない）ものなのである。しからば社会との関係はといへば、それは、

但し私が欲する所の生活を組立て、行くためには、己むを得ず、環境に働きかけて行かねばならぬ場合が生ずるかも知れない。而してその場合は過去に於ても生じた事であるから、未来に於てはおそらく過去にも増して多く生ずるだらうと思つてゐる。縦令然しかゝる場合が生じて、それは私が社会をいくらかでも善くしようといふ誓願なり野心なりから生まれ出た事ではなく、私が現在の私自身を住みよくしよう為の必要から惹起された事柄に過ぎないのだ。（同前）

というのである。

（このように烈しい個人主義は、彼が生活のどの瞬間にも徹底的に社会と対決させられてゐるが故に、孤独であり、不安である。）

（註六）といわれる所以であらう。

有島はここでもまだ、その眼を人間の内面性に向けている。変化の可能性を、社会革命よりも、まず魂の改革に向けているということなのである。何よりも個性の充実を目論んだ、「惜みなく愛は奪ふ」

における個性論を想起することができるところである。

私は元來個性の自由を極端に難有がる趣味を有つてゐる。（中略）社会の爲めでなく、一人の人の爲に。一人の人の本性の爲に、要求の爲に、幸福の爲に、自由の爲めに。（一人の人の爲に）

という思いには、エピグラフ詩が、革命志向をうたいだしたものであると同時に、現実的にはその挫折認識と、それにもかかわらずなお革命の可能性を信じるその可能性を、人間の魂のなかに継承されている（種子）の生命力に託して、（自由よ、君に絶望する者あればさせておけ——わたしは君に絶望しない、たとい何が起ころうとも）、とうたつてゐることと、みごとに響きあつてゐるということができよう。（自由）に人間の魂のなかに継承されている（種子）という表現を与えてゐるホイットマンであるということは、その可能性の表現であると言ふ意味で示唆に富んでいる。

*

『小さな灯』に収録されているエッセイは、数篇ずつまとめられてそれぞれにタイトルが付けられている。先にも述べたように、第一章は、「登音」というタイトルが付けられているが、つぎの第二章「雑信一束」は、大正八年から、十一年にかけて、雑誌「我等」に連載された七回分のうち、六回分までを纏めたものである。（註七）内容に関しては、佐々木靖章氏の有島武郎全集第八巻の解題に詳細な紹介（註八）があるが、本質的には「登音」に示されている個

性尊重の生き方を実戦した人々へのオマージュを通して、自らの生き方の根本理念の再確認をしているところである。

「雑信一束」のなかのとくに印象的なところのひとつである第十信は、「監獄部屋」という呼び方をされていた（「土工夫人身売買」問題の紹介で、かつて、日記に記した女工哀史に対する同情と共感（註九）の延長線上に位置づけられる労働問題への関心の深さを知ることのできる〈報告〉である。これについて有島が、〈以上の事実を骨子にして私は一つの創作を成就する事が出来るやうにさへ思ひます〉と述べているところは、創作への新しい可能性追求の方向づけを示唆するものであり、「宣言一つ」を読むためのひとつの手がかりにもなるところであろう。

なかでも庄巻は第十一信で、画家中川一政あての書信の形をとっているエッセイである。すでに有島をめぐる詩人たちの一人として取り上げた（註十）ので詳述はしないが、中川一政と、彼とは対照的な詩人として有島に紹介されている村山槐多とをその振幅の上限と下限とする有島の詩人への傾倒ぶりをみごとに示しているエッセイであり、ホイットマン詩「ヨーロッパ」にうたわれている〈若者〉——つまり詩人への期待の可能性のひとつが示されているところである。

この輯に収録されているエッセイ群において、次の章「北光」には、「ブランド」（大八・四）初出は大四〜五、「ルベックとイリーネのその後」（大九・一）、「イブセンの仕事振り」（大九・七）の三

篇が集められている。

これは、タイトルからも明らかのように、いずれもイブセン論であり、かなり古いものもあえて集めてあるが、一貫した主張は、やはり〈ブランドはアグネスに於てこの希望の権化を見、親しき決意もて叫べり。／「完全に自己を充実せん事、／これ人間の正しき權威なり。／この他何の庶幾するところぞ」とあるように、ここにあるのは「自己充実、つまり個性尊重への共感である。もつとも（やや沈黙せる後）／自己を充実するや。面かも父母伝来の負債をば如何にすべき」という逡巡は、有島の内面にある否定的自己認識であるカインの末裔意識と響きあっているところであり、そのことをも含めて、有島のイブセンとの共感の内実を知ることができるところである。また、〈成就し得ずんば少くとも意志すべし。意志せざるを得ず。こゝに我等の力はある本能はあり。この新しき力を力説せる「ブランド」が嵐のごとく欧州の思潮を震ひたるは洵に宜ならずや〉には、新しい可能性追求の姿勢への共感を見ることができ。あるいは、「海の夫人」論におけるエリイダへの言及、つぎの章「美を護る者へ」における女性論は、有島の女性論の原点にイブセンが深く関わっていることを明らかにしているが、有島の女性論そのものが、個性充実、個性尊重、内部生命充実論が集められている次の第四章「美を護る者へ」のひとつのヴァリエーションであることは、有島の女性論のひとつの章である「溝を埋めよ」（大九・五）に、〈個性のそのもの、完成といふことよりも、個性が社会に対して取る角度がいかにあるべきかに重きがおかれてゐる。その結果個性の退縮が起こり、延いては社会生活そのもの、退縮となる〉こと

への戒めが語られていることからも明かである。

最後の章、「春と秋」における自然観にも、かねて（生来の自然癖）（家族宛書簡 明三十三・三・十四）と自称した自然への親しみが、（私は屢自然に人以上の親しみを感ずる）という告白のなかに、（何物も何事も本当は人間程に生きてゐるのだ）という意味で、人間の本来の充実した姿の象徴的表現としての自然として表現されているようである。

紙幅の関係で詳述はできないが、要するに、この世に存在しているいっさいのものが、それぞれ、その個性を十分に充実させ、その本質を表現するかがり、それはそれ自体絶対の価値をもっているのだというホイットマンの主張は、（ホイットマンの詩を読んで見ると、／「俺はあるものが偉大で、あるものが矮小だとは云はない。／その時と所とを得たものは凡て等しい」……（自己の歌）／私のいさ、かな経験も亦同じことを私に教へる。）（往来雑記）というように、みごとに確認されていることになる。

有島が、『小さな灯』のエピグラフとして「ヨーロッパ」の末尾三行を引いたということは、おそらくかつて内村鑑三がそのホイットマン論「詩人ワルト・ホイットマン」（註十二）において、ホイットマンが「同情的詩人」であり、（詩神の心を授かつた者である）ことを、「To a Common Prostitute」の一節を引き、さらに（世の失敗者に対して）「私自身の歌」のなかの敗者への同情を歌った（余はまた戦敗者のために、戦場に斃れし者のために楽を奏す。（中略）

敗れし者万歳！（以下略）を掲げて、（余輩は近世の文学に於て、劣敗者に対する是よりも深い同情を知らない。成功者の謳歌を唯一の業とする今の文学者流は、此詩人の前に立ちて慚死すべきである）と述べているところに響きあっているであろう。

失敗者に対する有島の同情と共感は、ホイットマン詩「失敗した男女の叛逆者に」の訳出となつて表されている。

この詩は結局有島の『ホイットマン詩集』には採録されなかった詩篇のひとつであり、この訳出の経緯については、有島の（革命）に関する基本的な姿勢を見ることが出来るものとして、鈴木鎮平氏によつて詳しく紹介され、評価されている。（註十二）つまり、氏によれば有島がこの詩を訳出するにあつて採用した底本が、デイヴィッド・マケイ版ではなく、一八六〇年版であつたことを指摘し、そのことが、ホイットマンのラディカリズムからの離脱を意味しているとの指摘があるが、有島もまたその流れをくむ者として、つまり、有島のホイットマン享受が、（お前の手柄も大きくなければならぬ）「あなたの個性も宏大でなければならぬ」というところに主要点があつたであろうし、それは無論ホイットマンの主張を正しく理解した（この結果である）のである。そして、（ここに至つて有島訳詩「失敗した男女の叛逆者に」が「宣言一つ」（「改造」大十一・一・一）にまつわる、無産知識階級の総反発と、それへの有島の再反発という問題に深くかかわっていると考えないではいられない）ものであるという、つまり、（宣言一つ）の反論によつて、その自我の展開を後退せざるを得なくなり、ふたたび出口なき「個

性的内的衝動」(原註参照)との苦闘に沈潜させられたのである、と展望したい)(同前)という氏の意見は傾聴に値するものである。氏は、この問題に関しては、(この挫折の苦渋をこの一八六〇年版文の選択が立証しているのではないだろうか、という見解を述べるとどめておく)として詳述は避けておられるのであるが、この問題こそ、まさに有島武郎著作集第十三輯「小さな灯」のテーマに関わる根本問題なのである。それは、たしかに氏の指摘にあるように「宣言一つ」の反論によって、その自我の展開を後退せざるを得なくなり、ふたたび出口なき「個性の内的衝動」との苦闘に沈潜させられたのである」という一面を否定することはできないであろう。しかし、「個性の内的衝動」が、はたして(出口なき)とのみ有島に認識されていたか否かについては再考を要するのではないだろうか。そのことのひとつの手がかりとなるものに、「小さな灯」に付けられているエピグラフがあるのではないかと思われるのである。

社会を変化させる為には個性の中に自ら生み出された性格がある。特異な性格は往々にして社会の約束を踏み躪る。而して社会の形勢を根本的に変化する。そこに甫めて社会が新境地を拓くのだ。ある時はそれが進歩であり、ある時はそれが不幸にして退歩でさへあり得る。唯如何なる場合にもそれは停止ではない。転歩だ。(雑信一束——第四信)

〈繰り返し〉の〈生活を憎〉み、たえず変化することを求めた有

有島武郎研究——著作集第十三輯「小さな灯」を読む——

島は、そのひとつの可能性を「転歩」という新造語をもって表現しているのであるが、このところに、有島の変化志向、新しい可能性追究の態度が、あくまでも「性格」、つまり個性の「尊厳を認めてその眼で新しく生活を見なければならぬ」という基本的な姿勢によって貫かれていることを示している。有島はまず人間としてなすべきことが個性の充実であることを意図しているのである。

私は私だけとして性格を社会的約束の上位に置いて見るものだ。何故なら私は人生の可能性を信ずるからだ。人生の本能は人間を進歩させる事を信ずるからだ。従つて人間の本能に根ざす性格はその consumption に於いて人間をより善くする事を信ずるからだ。(同前)

エピグラフ詩が、革命待望詩であるという意味で、編集されているエッセイ群が、事柄として「宣言一つ」の前提になるものとして位置づけることができるものかもしれないという期待は、その意味ではひとつの方向づけがなされているということになろう。有島は、まず、個性の充実を意図しているのである。したがって、「宣言一つ」を革命志望者の敗北宣言としてのみ位置づけるのではなく、人間の可能性追究のひとつの表現として位置づけるのであるならば、あるいはそうであるべきだとする読みかたが、逆に可能になることを、「小さな灯」とそのエピグラフは示しているということにもなるのである。そしてその期待を実現することのできる存在として有島がひそかに思い描いていたのが「詩人」だったのである。

有島という詩人の役割について考えるとき、魂の革命(改革)を

可能にする者であるという答を用意することができる。しかし、そのために目論まれた個性の充実が、現実の問題として社会革命にどこまで有効性をもっているのかという問題もある。つまり、個性充実の充足度を革命遂行者としての条件として量る考え方と、革命遂行可能者の基本的な条件との間には、神と人間との差と同じような本質的差異が厳存しているのではないかと問(註十三)を無視することはできないのであるが、そのような絶対的な否定的状況認識の前に立たされて、有島の詩への、あるいは詩人への期待は、いったいかなるものであり、いかなるものへ発展してゆく可能性をもっているであろうかと問うときに、詩人とは有島にとつては、個性充実者と、第四階級者との統合的存在ではないかと思われてくるのである。その意味で「宣言一つ」が収録されている有島武郎著作集第十五輯「芸術と生活」のエピグラフが、“Poet's to Come”であるということは、示唆に富んでいるということが言えるように思われるのである。(註一四)

〔註〕

- 註一 財産放棄は、大正十一年三月、一族にまず〈宣言〉するかたちでその意向が伝えられ実行された。
- 註二 農場解放は、大正十一年七月一八日、北海道マツカリベツにある有島農場の解放無償譲渡を宣言することをもって始められた。
- 註三・五 清水春雄「第五章 自由・平等」(「ライラックの歌」一ホ

イットマンの教説」昭五十九・五 篠崎書林刊 所収)

註四 「初版の序」(ホイットマン詩集「草の葉」上 岩波版文庫 昭五十三・九 第十一刷 所収)

註六 富田彬「有島武郎とホイットマン」(立教大学「英米文学」第十一号 昭十三・十二)

註七 省略された最終回分は、著作集第十五輯「芸術と生活」(大正十一年・九)に収録されている。

註八 筑摩書房版「有島武郎全集」第八卷(昭五十五・一〇)の解題参照。

註九 有島武郎日記(明三十三・四・二十一)に記されている信州諏訪の女工哀史に対する同情と共感を想起することができる。(瀬沼茂樹「有島武郎伝・三 楡の樹陰―札幌農学校時代」「文芸」昭三十八・十一)

註十 「有島武郎研究―詩への逸脱」をめぐって(二)(昭五十一・十一 梅光女学院大学「日本文学研究」第十二号)

註十一 「櫟林集」(明四十二・二)のち、大正三年三月、畔上賢造との共著「平民詩人」のなかに「ワルト・ホイットマン」として採録された。

註十二 鈴木鎮平「訳詩『失敗した男女の叛逆者に』をめぐって」(「有島武郎におけるホイットマンの相貌」昭五十七・六 明治書院刊 所収)

註十三 亀井俊介「ホイットマンの政治思想」(「近代文学におけるホイットマンの運命」昭四十五・七 研究社刊 所収)

註十四 拙論「宣言一つ」試論」(「解釈と観賞」平元・二)